

三月二十四日（金）

亜衣と映美とを芽衣に任せ、一人でふらつと業務スーパーまで買い出しに行ってきた。途中で蔦屋にも寄り道して、いちご大福も買って来た。自分用にひとつ白餡を入れてもらったけど、取り合いにならないことを祈る。

冷蔵庫の野菜室に、ささやかな買い足しを入れ、冷蔵庫に筍の水煮やらベーコンやらを放り込む。すぐに使ってしまう予定だが、先にウスイエンドウを剥いて、豆ご飯の段取りをしなくては。

買い物袋を片付けながら、ボウルとウスイエンドウのパックを手に食卓へ。教育テレビに釘付けになっている子供たちを眺めつつ、豆を剥くための準備を済ませる。一つずつ取り出しては、背中の丸くなった部分を押す。鞘が僅かに開いたら、隙間に指を入れて中身を取り出す。豆と一緒に付いてきってしまう三角の白い帽子もきつちり外して、ボウルに入れる。

ボウルを軽く振った時に、まだ少し硬い豆同士が中でぶつかる音とか、ボウルに落ちる時の音に、春の訪れを感じてしまうのは僕だけらしく、芽衣の共感を得られたことはない。

一つ剥いては豆を外す。一つ剥いては豆を外す。テンポよく豆を向き、一通り剥き終わったら、鞘を元々入っていたパックに戻し、ボウルは流しにおいて水を入れ、パックはゴミ箱に。

豆を軽く洗ったら、今度は米を三合研ぐ。分量通りに水を入れ、豆を上に入れて、軽く塩を入れる。あとは、炊飯器を信じて、炊き込みモードでスイッチを押すだけ。

「ごめんね。任せつきりで」

洗濯物を畳み終えた芽衣が、キッチンに入ってくる。両手を洗いに流しへ行くうとするのを、手で制する。

「そっちも疲れてるだろ？ オレがやるから」

「いいの？」

「いいよ。ただの気分転換だし」

「じゃあ、よろしくお願いします」

芽衣はサツと食卓に座った。映美を膝の上に置いて、テレビにかじりつく亜衣を眺めながら、手元のタブレットをサツと見る。

両手鍋にたつぷりの水を入れ、ひとつまみの水を入れて火にかけた。換気扇のスイッチを入れ、さつき買ってきたブロッコリーを野菜室から出して水でよく洗う。

この二、三日の間に飲んだ強炭酸水やら、エナジードリンクやらの残骸が目につく。先週の資源ゴミに出したところなのに、年度末の追い込みと鼻炎薬とで、僕の刺激物の摂取が増えている。

武藤さんのところへ入社する日も増やしたりしたもの、久しぶりの本格的な繁忙期に在宅で根を詰めても、中々捗らない。僕はささやかに家事をすることでガス抜きを、芽衣にも何かリフレッシュになるものを段取りしたいが、向こうも向こうでそれなりに仕事が詰まっている。

何かいいアイデアが出ないものか、今度はアスパラの硬い部分を折り取りながら、考える。ポキン、ポキンと、コレもコレで心地いい感覚なんだけど、本数はそれほど多くないからすぐに終わる尊さもある。断面をピーラーで少し削って、あとは軽くソテー、かな。

ポコポコと沸騰してきたところに、ブロッコリーをフサの方から放り込む。あつという間に四月、それからゴールデンウィークがやってくる。今年の花見はどうしようか気かけながら、次の段取りを考えた。

初出 令和三年四月二六日 NNN (旧サイト) にて公開